

頑張るのは良いことだ。
うん。

ゴズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頑張るって色々あるよな〜…って話し。

目次

頑張るのは良いことだ。うん。 | 1

頑張るのは良いことだ。うん。

テストで良い点を取る為。

スポーツで良い成績を残す為。

他人を蹴落す為。

他人を貶める為。

他人を喜ばせる為。

他人を笑わせる為。

例を挙げれば、それこそ切りが無い程に頑張ることと言うのは出て来るだろう。

プラスかマイナスかなんてことはどうでも良い。

とにかく頑張ると言う行為その物に意味があるのだ……なんて知った様なことを

言っているが、まあ、何も知らん。

そう思うだけだ。

時刻は午後6時。

今日は知り合いの所属しているアイドルグループのライブがあり、その招待券を貰っているオレは、その会場に向かった。

顔見知りの人が何人かいたから、控え室の通して貰えて、向かった先で見たのは立ち竦んでいる知り合いのアイドルだった。

他には誰も居らず、あつたのは無残に切り裂かれた衣装と、肩を震わせている知り合いだけ。

とりあえず声を掛け、振り向いた知り合いはやっぱり泣いていた。

努力を否定、もしくは水泡に帰されたら、落ち込んだりするのは多分当たり前で、知り合いもその当たり前になっていた訳だ。

泣き止むまで側に居り、替えの衣装が届いた所で残り3人がいる所に向かった。

そこで今の時間になる。

目の前には、舞台袖で控える3人の女。

「え〜……とりあえずだ。アイツに嫌がらせするなら、あんな低レベルなことせずに、正面から行け。それが出来ない様なら、アンタ等に人を貶める為に頑張る資格は無い。ついでに……ついでに………思い浮かばんな。まあ、良いや。無駄な努力お疲れ様。これからも精々無駄に頑張ると良い。どうせ頑張っても今のアンタ等には何も返ってこないから」

んじや。

と言いつつその場を去って客席へ。

ライブは滞りなく成功。

4人は表面上だけ無駄に仲良く過ごしていた。

まあ、アレだ。

どの様な形の頑張るであれ、だ。

「頑張るのは良いことだ。うん」

これからも、オレは頑張らないことを頑張つて行こう。

舞台を見ると、知り合いが手を振っていた………だから、何となく振り返しておいた。